

都市のカルチュラル・ナラティブ

2022

CULTURAL CITY
NARRATIVE OF A
都市のカルチュラル・ナラティブ



都市の カルチュラル・ ナラティヴ 2022

P.02 はじめに
本間 友

01 包摂的な文化体験の創出

P.04 01-01 アクセシビリティ・イノベーション・ワークショップ
森山 緑

P.08 01-02 コレクティヴ・メモリー 2
地域の文化と記憶を写真で読み解くワークショップ
石本 華江

P.12 01-03 包摂的な文化体験のためのコンテンツ検討 WG
森山 緑

02 地域の文化資源を可視化し、相互につなぐ ラーニング・ワークショップの開催

P.14 02-01 日常の風景の中に文化財を観る
地域の彫刻と建築を学ぶワークショップ
新倉 慎右／桐島 美帆

P.18 02-02 地域の寺院を訪ねる
寺院の文化財と現代における活動を学ぶワークショップ
本間 友

03 文化財に触れる：「オブジェクト・ベースト・ラーニング」 ワークショップの開発と開催

P.20 03-01 地域文化を対象としたオブジェクト・ベースト・
ラーニング
本間 友

P.24 活動記録

都市のカルチュラル・ナラティブ '22

本間 友／慶應義塾大学アート・センター

港区を歩いていると、街のそこかしこで、高くそびえ立つクレーンに出会う。港区では近年、大規模な再開発が各地域で行われており、街のありかたや産業が大きく変化している。新たなコミュニティや活動がつねに生まれ変容してゆくことは都市のダイナミックな魅力であるが、その背後に様々な分断が生じている。情報化の進展によりかつてない速度で変化していく社会の中で、世代、デジタル・リテラシー、障がい、ライフステージ、価値観などが様々な異なるコミュニティの分断の拡大を防ぎ、人々の孤立化を防ぐことは、都市における大きな課題である。

加えて、大規模なビジネスが集積する国際都市である港区は、現代文化の発信地であると同時に、江戸時代からの文化財を継承する歴史文化都市でもある。伝統文化から現代文化にいたる多様な文化資源を対象に、様々なプレイヤーが様々なレベルで活発に活動を行っている一方で、それらをつなぐコミュニティが育っているとはいいいがたい。本プロジェクトは、これら2つの課題、「社会の変化によるコミュニティの分断」と「多様な地域文化資源に根ざした文化活動をつなぐコミュニティの不在」に対して、文化の継承と時代に即した更新、そして社会への再接続を担うミュージアムの機能を強化するモデルを提示することによって対応することを目指している。

2022年度は、3つの軸の元に活動を展開した。第一には、与条件や価値観の異なるコミュニティのメンバーが地域文化資源を活用した文化体験とともに参加し、体験を共有することを通じて、コミュニティのゆるやかな接続を図るプログラムを開発し実施すること。第二には、地域の文化資源を可視化し、相互につなぐラーニング・ワークショップを企画すること。第三には、「内省」と「対話」を通じて地域コミュニティの分断を縫い合わせ、多様な文化が共生する社会の実現を目指すワークショップ・プログラムを開発することである。本報告書では、これらの3軸にそって実施した企画の内容と成果について報告している。

本プロジェクトが実施する企画の特徴は、ミュージアムや地域で実施されている既存の活動に対して、社会課題に対応していくための「視点」と「プログラム実施方法」の強化モデルを提供する点にある。プログラムをスクラップ＆ビルドで作り上げるのではなく、すでにある実践を組み合わせ、必要な視点や機能を補うことによって、持続可能かつスケーラブルな文化プログラムを実現することを目指す。

本報告書の内容が、これからの社会に対応した活動を模索するさまざまな文化機関にとつての、ピア・サポート資料となれば幸いである。

Cultural Narrative of a City '22

Yu Homma/ Keio University Art Center

If you take a stroll around Minato City, you will come across towering cranes all over the city. In recent years, Minato City has seen significant redevelopment projects in various places, transforming its character and industries. The ceaseless creation and transformation of new communities and activities are one of the dynamic charms of the city. Still, it has also created various disruptions in the background. In a society that is changing at an unprecedented pace due to the advance of information technology, preventing the growing fragmentation of communities with different generations, digital literacy, disabilities, life stages and values, and preventing people from becoming isolated is a major urban challenge.

In addition, as a cosmopolitan city with a cluster of large-scale businesses, Minato City is both a source of contemporary culture and a historical heritage inherited from the Edo period. While various players are actively working on different levels to target diverse cultural resources ranging from traditional to contemporary culture, it is difficult to say that a community connecting these resources has been developed.

This project, "Cultural Narrative of a City", aims to respond to these two challenges - 'the fragmentation of communities due to social change' and 'the absence of communities linking cultural activities rooted in diverse local cultural resources' - by presenting a model for strengthening the functions of museums, which are responsible for the inheritance of

culture, its renewal in line with the times and its reconnection to society.

In FY2022, our activities were developed along three key axes. The first is to create and implement programmes for the connection of communities by enabling community members with different given conditions and values to participate together in local cultural experiences and to share their experiences. The Second is to organise learning workshops that visualise and interconnect local cultural resources. The third is to develop workshop programmes that stitch together the fragmentation of local communities through 'reflection' and 'dialogue' and aim to realise a society where diverse cultures can live together. This report describes the content and results of the projects implemented along these three axes.

The distinctive feature of the programmes of our project is that it provides a model for enhancing 'perspectives' and 'programme implementation methods' for existing activities in museums and local communities in order to respond to social issues. Rather than scrap-and-build programmes, the project aims to develop sustainable and scalable cultural programmes by combining existing practices and supplementing them with the necessary perspectives and functions.

We hope this report will serve as a peer-support resource for various cultural organisations seeking to address the challenges of the future society.

アクセシビリティ・イノベーション・ ワークショップ

01-01

報告 | 森山 緑

包括的な文化体験の創出

本事業の実行委員会、「都市のカルチュラル・ナラティブ実行委員会」の構成機関はすべて東京都港区に在し、多様な文化財や歴史的資料、美術作品を所蔵している。こうした地域の文化資源はミュージアム等の形をとり一般市民に公開されるなどしている。しかしさまざまな属性の市民のなかにはそうした文化資源にアクセスすることや、文化機関に赴いて鑑賞体験を持つことに困難を感じている人々も存在する。国内のいくつかの美術館はこうしたアクセシビリティ改善の方法を探りながらワークショップや鑑賞プログラムを実施してきており、その傾向は2010年代以降顕著に増加している。令和3年度にアート・センターが行った「アクセシビリティ検討ワーキンググループ」では実際に鑑賞プログラム等を行っている美術館の担当者や、プログラムを企画している非営利団体の方に話を聴く機会を設け、現状の把握と課題を抽出した¹。

それを踏まえ、本年度は美術館以外の文化機関と連携し、障害をもつ人、もたない人がともに参加し、文化体験を共有することを通じて、コミュニティのゆるやかな接続を図るプログラムを2回実施した。また、これらのプログラムを通じて得た気づきや疑問、新たな課題を洗い出し、とりわけ運営側の実施者がより充実したプログラムを設計するためにはどのような要素が肝要であるかをまとめた小冊子を作成した。さらにプログラム実施機関の一つである東京海洋大学マリンサイエンスミュージアムの案内パンフレットを点字翻訳した印刷物を製作し、視覚に障害をもつ来館者への対応を向上させる試みを行った。以下に、各プログラムの実施内容を簡略に述べる。

| Event Data |

2023年2月4日(土)

平野 晴野／国立大学法人東京海洋大学ミュージアム機構
マリンサイエンスミュージアム

林 建太／視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

井戸本 将義／視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

花宮 香織／視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

平 海依／視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

a. マリンサイエンスミュージアム：目の見える人と見えない人の まっすぐ & ぶらぶら対話ツアー

東京海洋大学マリンサイエンスミュージアム（以下マリンサイエンス）は水産科学技術に関連する資料を収集、保存、展示公開を行なっている大学付属博物館である。本プログラムは非営利団体「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」（以下、とつくる）の協力のもと、慶應義塾大学アート・センター（以下アート・センター）とマリンサイエンスの共催で開催された。アート・センターもマリンサイエンスもこれまでこうしたプログラムを実施した経験がなく、とつくるのスタッフと共に数度にわたっての打ち合わせ、現地の下見を行い準備段階での時間と労力は予想以上に必要であった。

しかし視覚や聴覚に障害がある方を含む参加者とともに、博物館の展示物（剥製などの標本、多様な資料やクジラの巨大骨格標本など）を鑑賞するプログラムはおそらく日本では初の実施例であり、大きなトラブルもなく安全に実施できたことの意義は大きいと考える。



マリンサイエンスミュージアムでのワークショップの様子



プログラムは鑑賞スポットを3ヶ所設け、2班に分かれて移動しながら各スポットで立ち止まり、展示物を前に参加者同士の対話によって鑑賞する方法をとった。また、参加者同士の対話を阻害しない程度にマリンサイエンスの学芸員の方には適宜解説をしていただいたり質問を受けたりしてもらい、「ミュージアム体験を楽しむ」だけでなく「資料から学ぶ」要素も加えられたことで、参加者の満足度が上がったこともアンケートから読み取れた。障害を持っている方にとって博物館での鑑賞がハードルが高いという現状を踏まえて本企画を実施したが、参加者からは「満足した」「ぜひまた実施して欲しい」との声が非常に多く寄せられ、美術館とともに博物館での鑑賞プログラムのニーズも高いことが明らかとなった。

b. インクルーシブを語る会：歴史文化あふれる増上寺とともに考える

港区芝にある大本山増上寺は、浄土宗の七大本山の一つで明徳4年（1393）に、西誉聖聰上人によって、現在の千代田区平河町付近の地に創建された。現在の芝の地へ移転したのは慶長3年（1598）、徳川家の菩提寺（先祖代々のお墓がある寺）となり、徳川幕府の手厚い保護のもとで繁栄した。徳川家ゆかりの文化財を所蔵しており、地域にとって重要な寺院であると同時に国内外からの来訪者も多く宗教施設にとどまらない文化機関である。本プログラムは寺社において、多様な属性の来訪者に対応するためどのような取り組みが行われ、

| Event Data |

2023年2月16日（木）

武智 公英／大本山増上寺

赤羽 道宣／大本山増上寺

林 建太／視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

井戸本 将義／視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

松本 晶子／視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

平 海依／視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

増上寺ではインクルーシブについて話し合った





また今後どのような対応が必要であるかといった事柄について参加者とともに語り合う会を実施した。

プログラム名にある「インクルーシヴ」とは「あらゆるものを包含する」といった意味で、文化的体験をだれもが気軽に持つことができる環境を整えてゆくことが、近年文化機関には求められている¹。高齢者や外国人、子連れの方や障害をもつ方にとって、寺社においてはどのような取り組みが可能であるか、また歴史的建造物を抱える寺社でのハード面での改善には限界があると考えられるが、そうした条件下でどのような対応が可能であるかについて、本プログラムでは増上寺での取り組みについて、参拝部の武智公英上人からお話をいただいた。視覚に障害をもつ3名を含む、とつくるのスタッフにも参加いただき、当事者として寺社での体験などについて話を伺った。

増上寺はこれまで、建物へアクセスする際の段差の解消や、トイレにおむつ替え設備を設置するなどハード面での対策を進めてきた。外国からの来訪者に対しては境内の表示のバイリンガル化を行うなど、多様な属性の人々を受け入れる方策をとってきた。当事者の方から出された意見には、そうしたハード面での対策も重要だが、何よりも心理的障壁がない環境にすることが求められるとの発言があり、この点は寺社に限らずあらゆる機関にも該当する点であろう。

本プログラムは講師によるレクチャーではなく、一般参加者とともに「語り合う」ことを主眼に置き、各自がカジュアルに意見を述べる形式をとった。参加者には港区観光ボランティアや障害者支援に携わる方なども居り、増上寺の方から貴重な話を聞くことができ今後の活動に活かしていきたいとのコメントもあった。また障害を持つ当事者の方の体験談や困りごとについて直接聞く機会が限られている中、今回のプログラムのようにより多様な人々を受け入れる側、訪れる側の双方がざっくばらんに語り合う機会を持てたことは意義があったと考える。終了後のアンケートでは「ぜひ継続してこうした会を開催してほしい」などの意見が寄せられた。

¹ 令和3年度文化庁／地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業「更新される都市文化：地域文化機関の連携に基づく文化とコミュニティの持続的成長モデル形成事業」によるプロジェクトの一環で行った。

² 2015年9月、国連は持続可能な開発目標として17の目標および169項目のアジェンダを全会一致で採択した。地球環境、技術開発、経済格差（貧困問題）等が挙げられる中には「教育」も含まれており、「誰一人取り残さない（leave no one behind）」という理念のもとに各分野で行動が求められている。（国際連合広報センターホームページ）https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/

コレクティヴ・メモリー 2

地域の文化と記憶を写真で読み解くワークショップ

報告 | 石本 華江

第1回ワークショップ

昨年開催した全5回のラーニング・ワークショップでは、個人の持っている記憶材を地域や集団の記憶として公共化することについて、そして体験を通じて新旧コミュニティをつなぐ対話を創出し、コミュニケーションを図ることについて、ゲストによるレクチャーを通じて学ぶ機会を設けた。昨年に引き続き、再び「写真」を切り口に建築にまつわる記憶や建築によって引き出される記憶の収集と地域コミュニティのあり方について学ぶ企画を実施した。第一回目はオリエンテーションとしてワークショップの内容を説明すると共に、写真家の新良太氏を講師に迎え、建築写真に特有の問題についてアドバイスを頂いた。都市と建築を撮影するとはどういうことか、建築写真を専門とする新氏が心がけていることや注意している点についてお話しいただいた。「都市と建築は撮り方が違う」と新氏は仰り、実際のお仕事で撮影された写真作品を用いて、また撮影機材を紹介しながら具体的にご説明くださった。次回までのワークに向けて「私の中の港区」をテーマに写真を用意してもらい、一人8枚までNotionにアップしてもらった課題について説明してもらった。ワークの説明に加えて、デジタル・プラットフォームのログインの仕方や使い方をレクチャーする時間を設けた。

| Event Data |

2022年11月16日(水)

12月7日(水)

12月21日(水)

新良太／写真家



レクチャーする新氏



第2回ワークショップ

第二回まで三週間ほどの時間を利用して、地域コミュニティのメンバーにそれぞれ建造物をテーマとして手元に所持する写真、新たに撮影した写真を用意してもらった。まずはワークで集めた写真素材や、それらに添えた参加者自身のコメントについて新氏から批評やコメントを頂いた。その後4人で1組の3グループに分け、同じ写真素材1枚を各グループに配布し、写真にタイトルをつけてみるワークを行なった。各チームの発表に続き講師からのコメントを通し、「いかに写真を読みとくか」という視点の持ち方・創り方が提示された。次に別の写真を用いて「記憶」というテーマを加え、タイトルをつけるワークに取り組んだ。再び各組の発表に加え講師からのコメントを頂き、最後に次回までのワークの練習を兼ねてグループで4枚の写真を選び、1冊のZINEを作ってみた。4つの写真を繋げるナラティブを集団で創りだす行為により、対話型・双方向型の学びとなった。20～70代までの世代も違い、外国人を含む多様な属性の人々が建築をテーマに共同で作業し言葉を紡ぎ出すことで、それぞれの個人的な、また在住・在学という同じ地域で過ごしているからこそそのナラティブが形成され、各人の共通点も見えてくるワークとなった。



写真にタイトルをつけてディスカッションする



第3回ワークショップ

最終回までのワークとして自分の写真8枚を選び、写真とナラティブを組み合わせ手作業で一冊の photo ZINE を作ってもらった。まずはそれぞれの ZINE を並べ、お互いにコメントを付箋で貼り付けていった。参加者が自分の ZINE を発表する際には、別の人がテキストを読み上げ、他者からの視点を交えながら本人による発表を行なった。加えて付箋に書かれたコメントを発表すると共に、講師の新氏からも一人ずつ講評を頂いた。「良い写真とは見た人のイメージが膨らむものであり、自分でイメージを膨らませる力がないと写真に返ってこない」といったコメントなど、新氏はご自身の経験を踏まえながら、それぞれの写真やナラティブの創り方に対して具体的に、かつ的確なアドバイスをされていた。「自分の良い写真とは何か」を考えるのに終始するのではなく、一つの写真を撮影するにあたっても別の人の視点を内在化することも伝えておられた。そしてワークショップ終了後、最終成果物として手作りで作成した各自の ZINE を印刷・製本し参加者に郵送した。

港区では大規模な再開発が行われており、町のありかたや産業が大きく変化している。新しい人々と活動が常に生まれ続ける都市において、文化やコミュニティの分断を防ぎ、培われてきた文化の接続を図ることは大きな課題である。今回は「写真」を用いて実践を通じて学ぶことで、デジタル・ディバイド解消も意図したピア・ラーニングの場となるよう企画していた。「港区を様々な視点や方法でほりさげていく試みが良いと思う」といった、参加者から満足度の高い感想も寄せられ、催事終了後も交流が続いているとのこと、概ね企画意図が実現できたように思われる。





制作した ZINE を発表する参加者

包摂的な文化体験のための コンテンツ検討 WG

01-03

報告 | 森山 緑

a.『私たちが見てきて話したインクルーシブ鑑賞ワークショップの記録』

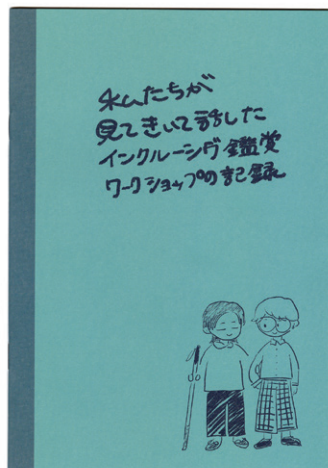
| Book Data |

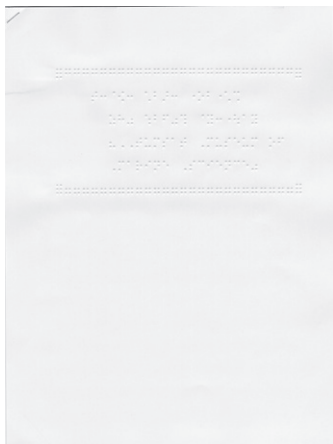
2023年3月31日

A5版、20頁

誰でもが気軽に文化的体験をもつことができる社会をめざして「インクルーシブ」な鑑賞ワークショップを実施してきた中で、アート・センターの学芸員補とインターン学生の2名が「気づいたこと」「感じたこと」「疑問に思ったこと」などを運営、実施側からの視点でまとめた冊子を発行した。近年こうした取り組みは多くの美術館で実施しているものの、運営プロセスで遭遇する困難や、ワークショップ実施後の振り返りの中での気づきをまとめたものは少ない。これからトライしてみようと考え、文化機関の方達へのヒントともなる内容をまとめることができた。

本書の特筆すべき点は、プログラムを通じて個人々々が感じたことをわかりやすく示していることである。たとえば目の見えにくい人との接し方において歩行の際のガイディングや最寄駅までの送迎、作品を前にした時の説明など、何をどの程度まですれば良いのかは事情によって異なり、人員配置も含めて事前に実施チーム内で方向性を決めて充分に共有しておくことが重要であること、また過剰なサポートが立場の固定（説明する側される側）につながってしまう危険もあることなどが指摘されており、今後の取り組みにおいて有用なヒントとなるに違いない。





パンフレットの点訳物

d. 東京海洋大学マリンサイエンスミュージアム パンフレット 点訳

インクルーシヴ鑑賞ワークショップで協力をいただいた東京海洋大学マリンサイエンスミュージアムの展示案内パンフレットの点訳を実施した。2月4日に実施した鑑賞ワークショップに参加した視覚に障害を持つ方々から、ぜひまたこのミュージアムを訪れたいとの希望があり、今後対応を拡充していきたいとの館側の要望も踏まえて、必要があるとの判断にいたり、日本点字図書館の協力を得て実施した。今回は文章部分のみを点字翻訳したが、時間的余裕をもっていずれはフロアマップなどの図版部分を触図化するなど、来館者にとってより利用しやすい対応を考えていく必要もあると考える。

マリンサイエンスミュージアム パンフレット



日常の風景の中に文化財を観る

地域の彫刻と建築を学ぶワークショップ

報告 | 建築プロムナード／建築ツアー：新倉 慎右
彫刻ツアー：桐島 美帆

建築公開日（建築プロムナード）

| Event Data |

2022 年 11 月 28 日（月） - 30 日（水）

慶應義塾大学アート・センターでは、義塾が有する歴史的・文化的価値が高い建築物を社会に開いていく普及活動を行っている。旧ノグチ・ルームが示すように、文化財は価値の共有がされず忘れ去られると、驚くほど簡単に損なわれてしまうことを認識し、また文化財を管理する立場にある我々にとって、こうした活動は貴重な文化財を次の世代に残していくための義務でもある。

そのような観点からアート・センターでは例年「建築プロムナード」を開催し、マップを配布して三田キャンパスの建築物を鑑賞してもらう機会を設けている。普段入れない演説館や旧ノグチ・ルームにも入ってもらうことで、野外彫刻も含めて文化財の存在とその価値を認識してもらうこのイベントは、毎年多くの参加者を迎えている。

2022 年度は「令和 4 年度文化庁 Innovative MUSEUM 事業」の助成を受けて規模を拡大し、さらに多くの参加者を迎えることができた。建築物はその空間に入って初めて味わうことができる空間芸術であり、こうしたイベントの重要性と、普及活動の必要性を改めて認識する機会となった。

慶應義塾大学三田キャンパスを舞台としたガイドツアーの様子



建築ツアー

我々が暮らしている都市は、ほとんどの部分が建築物によって成り立っている。しかしたとえば、新しい建築が完成してしばらくは注目していても、やがてその目新しさも日常の中に溶けていく。普段我々は建築物に囲まれ、ほとんどの時間をその中で過ごしているにもかかわらず、それに日常的に注意を向けることは少ない。彫刻などのようなわかりやすい文化財でなく、日常の風景に混在する文化財としての建築は、意識的に目を向ける必要がある。しかし一度そのような意識を持てば、その建築物のある風景はもとより、何気ない日常の風景にも変わった建築、気になる建築が存在することに気づき、風景は彩りを得る。

本ワークショップではこうした観点から、慶應義塾周辺で、港区の文化財としての建築物を専門家の解説とともに巡った。慶應義塾と明治学院には、それぞれの大学の歴史と深く結びついた古い建築物がのこされており、また建築が地域の歴史と不可分であるということを実感した。また港区立歴史郷土館(旧公衆衛生院)や東京都庭園美術館もそれぞれ 1930 年代の建築物でありながら多くの人が通う公共施設となっており、日常の風景の中にある文化財としての建築は決して単なる飾りではなく、都市の中に息づいた重要な構成要素であることを知る機会となった。講師の五十嵐太郎氏は広く建築史に通じ、各建築物において歴史だけでなく様式やディテールにも言及し、参加者は建築物の楽しみ方も学ぶことができた。参加者の声から、質の高い文化財が日常に埋もれていることの驚きと、そうしたことに目を向けていくという意識が各自の中に生まれたことがわかったのが大きな収穫であった。

港区の貴重な歴史的建築物を巡った



彫刻ツアー

公園や広場など、公共の場所には多くの屋外彫刻がある。港区にも様々な歴史を持つ彫刻作品が存在している。しかし、日々そばを通り過ぎる人でも、彫刻を視界に捉えてはいても、彫刻を作品として認識している人は多くはない。そこで今回、港区および慶應義塾大学三田キャンパスの屋外彫刻を専門家と共に巡るワークショップを企画した。講師は彫刻家／武蔵野美術大学教授の黒川弘毅氏に依頼した。黒川氏は、全国の屋外彫刻の保存修復に関する経験を有し、慶應義塾の彫刻の保存修復処置を長年担当していただいている。鑑賞作品は有栖川宮記念公園内の2点と三田キャンパス内の8点および旧ノグチ・ルームである。

ワークショップでは、彫刻作品の作者と像主についてはもちろんのこと、素材や鑄造方法、像の建立経緯、錆の状態の話に至るまで、講師の幅広い分野にまたがる知見から様々な話が繰り広げられ、単なる作品解説の域を超えて講師の知見・経験・情熱を参加者と共有する機会となった。地域の彫刻をめぐるだけではなく、専門家との交流によって知らない世界を知る、その知的体験がワークショップを活気づけていた。今回のように格式張らずに専門家の話を聞き、対話する機会はまだまだ限られているのではないだろうか。専門家と文化財をつなげ、地域にひらいていく活動は、大学を拠点にして今後更に展開してゆけるだろう。

Event Data

2023年1月30日（月）

黒川 弘毅／彫刻家、武蔵野美術大学彫刻学科教授

彫刻を解説する黒川氏





地域の寺院を訪ねる

寺院の文化財と現代における活動を学ぶワークショップ

報告 | 本間 友

見学会 & トーク「泉岳寺を訪ねる」

港区には江戸時代からの文化財を継承する寺院が所在し、大きく変化する社会や、人々の日常と関係を結びなおしながら活動が続いている。本見学会では、1612年に徳川家康によって創建された泉岳寺を訪ね、ガイドツアーとトークを通して、寺院の文化や現代における活動を学んだ。

トークでは、泉岳寺の寺院としての歴史や所蔵する文化財や赤穂義士との関わりを解説するとともに、コロナ禍において泉岳寺がどのような活動を行ってきたのかを紹介した。トーク内の質疑応答の中では、寺院文化がもつ独自の尺度や時間軸の一端が明らかになった。

ガイドツアー「泉岳寺の境内を知る」

泉岳寺の牟田賢明氏より、泉岳寺の歴史や禅宗寺院としての役割、浅野家との繋がり等についての説明を受けながら、境内を見学した。

泉岳寺は約400年前、1612年に徳川家康が今川義元の菩提を弔うために創建された。元は桜田門の外、今の警視庁のあたりからホテルオークラにかけて、広い敷地にあったと言われている。それが寛永の大火（1641）で焼失。その後、現在の高輪に再建された。

浅野内匠頭が吉良上野介に斬りつけられる赤穂事件が1701年に起こり、1702年12月14日に赤穂浪士が吉良邸に討ち入り。1703年2月8日に義士たちは切腹し、泉岳寺の墓に埋葬された。明治初期になると廃仏毀釈の余波を受けて疲弊。1945年5月の空襲では、本堂、庫裏、書院などが消失し、70年かけて再建したという。

| Event Data |

2023年3月10日（金）

牟田賢明／泉岳寺知客兼受廻主事
本間友／モデレータ、慶應義塾大学アート・センター

ツアーの様子



ガイドツアーでは、普段は一般に公開されていない本堂と書院を拝観したのち、港区登録文化財である山門と中門、および国指定史跡浅野長矩墓および赤穂義士墓を訪ね、赤穂義士に関連する文物を収めた記念館を見学した。

トーク「泉岳寺の文化と近年の活動」

ガイドツアーに続くトークでは、参加者からの質問を交えながら、泉岳寺の近年の活動について、引き続き牟田賢明氏より紹介を行った。

新型コロナウイルス感染症によるパンデミックは、あらゆる種類の文化機関に大きな影響を与えた。泉岳寺も、毎年春と冬に行っている義士祭を中止する、朱印の提供を見合わせるなど、広く一般に公開した活動については、社会的なガイドラインに沿った対応を行ったという。しかし、個人による参拝や法事など、寺院の日常的な宗教的・文化的活動に関連する領域については一律に対応を定めず、実際に寺院に足を運ぶ個人とのコミュニケーションの中で実施のあり方を決めていったという。

このような姿勢には、公共的でありながら一方で非常にプライベートな領域を併存させている、寺院の特徴が表れている。さらに、急激な速度で進む社会変化に対して、その一部を参照しながらも、自らのもつ歴史的・文化的な尺度や時間軸を自然に維持していくあり方に、都市に存在する多様な文化圏としての寺院の姿を見出すことができた。

牟田氏の話に聞き入る参加者



地域文化を対象とした オブジェクト・ベースト・ラーニング

03-01

報告 | 本間 友

本活動では、近年、高等教育機関を中心に実践されているモノを介した学びのメソッドである「オブジェクト・ベースト・ラーニング」（以下、OBL）を、地域の文化機関で実践してゆくためのプログラム開発に関わる検討を行い、プロトタイプ・ワークショップを実施し、その内容を検証した。

| Event Data |

2022年12月20日（火）
Japan Cultural Research Institute（以下 JCRI）
NHK 放送文化研究所、味の素食の文化センター

1. OBL 実践のためのワーキング・グループ

活動の第一段階目として、OBL の基本的な方法論や大学を中心とした高等教育の場における実践例についてプロジェクト・メンバーと情報を共有するとともに、その実践をワークショップという形で地域の文化機関にどのように伝播させていくのがよいか、具体的な手法のレクチャーを含めた意見の交換を行った。

OBL は、近年の学習者自身による能動的な学びが促されるアクティヴ・ラーニングの流れの中で、特にイギリスやオーストラリアの高等教育機関において盛んに実施されているオブジェクトを中心においた学習方法である。OBL では、学び手がオブジェクト＝モノ（文化財）と直接出会うことによって、モノを通じて学習者が自らの背景や認識を知るとともに、モノを介して違った価値観をもつ他者との対話が促される。学習者の「内省」と「他者との対話」を促すという特徴から、近年、ウェルビーイング領域でもその実践が取り組まれ、広く社会教育的な実践として進展しつつある。

ワーキング・グループでは日本のミュージアムにおける OBL 実践の第一人者である渡部葉子（慶應義塾大学アート・センター）より、OBL のもつ歴史的背景やその構造といった概要、特に近年に慶應義塾大学の講座の中で学生と実践して



ワークショップで作品を手にする参加者

に作品に触れつつ、様々な世代とバックグラウンドを持つ参加者に対して、オブジェクトへ接近していく道筋を示した。ワークショップの基本構成は、「アイズブレイク」「文化財取り扱いの基本」「グループワーク」「ラップアップ」の流れで実施した。

者からは「普段1つの作品をこれほど時間をかけて見ることが無いので、とても貴重な良い時間になった」「作品を見方や感じ方の個人差を、本人の言葉で聞くことができた」などの感想が寄せられた。また、美術館へ行き慣れている参加者からは、美術館で実践される対話型鑑賞教育との違いに関心を持つ様子もうかがえた。

3. 振り返りのワーキング・グループ

活動の三段階目として、ワークショップ実施後に講師・ファシリテーター、参加者、運営に関わったJCRIメンバーによるワーキング・グループを開催し、OBLの実践について、現代美術の現場で行なうことの意義とそこで生じるブラクティカルな諸課題を議論した。

講師を務めた渡部からは、大学で実践するワークとの違いが語られた。場所もメンバーの構成も「大学」という括りのなかである程度整備された状態、あるいは共通認識的に「文化財」という枠組みがある中で実施するOBLのワークと、より多様な背景や動機をもった参加者を迎える地域におけるワークとでは、ファシリテーションの方法が大きく異なることが明らかになった。

慶應義塾大学アート・センターのメンバーからは、教室のような無性格な場所ではなく、現代美術ギャラリーで実施したことの意味が語られた。作品を扱っている場所やそこで活動している人々のあり方に身近に接しながらワークを行うことで、作品の周辺にも自然と思考が及ぶようになり、オブジェクトとの深いエンゲージメントを通じて自らの思考を掘り下げ、他者と共有していくというOBLを強めることができたと考える。

一方、運営面については、参加者のこれまでの履歴がさまざまなので、個別のガイディングが必要であること、特に作品に触ることは、ほとんどの人にとっては初体験となるので、何がポイントなのかを時間をかけて伝達することなど、課題も多く指摘された。

| Event Data |

2023年2月24日（金）
慶應義塾大学アート・センター
Japan Cultural Research Institute

2022-2023 活動記録

01 包摂的な文化体験の創出

01-01 アクセシビリティ・イノベーション・ワークショップ

2023年2月4日

マリンサイエンスミュージアム：目の見える人と見えない人のまっすぐ & ぶらぶら対話ツアー

参加者 | 20名（うち視覚障害者8名、聴覚障害者2名） 場所 | 東京海洋大学マリンサイエンスミュージアム

講師 | 平野 晴野（国立大学法人東京海洋大学ミュージアム機構マリンサイエンスミュージアム）、林 建太、井戸本 将義、花宮 香織、

平 海依（視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ）、瀬戸口 裕子、山崎 薫（手話通訳者）

2023年2月16日

インクルーシヴを語る会：歴史文化あふれる増上寺とともに考える

参加者 | 12名 場所 | 大本山 増上寺

講師 | 武智 公英、赤羽 道宣（大本山 増上寺）、林 建太、井戸本 将義、松本 晶子、平 海依（視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ）

01-02 コレクティブ・メモリー 2 地域の文化と記憶を写真で読み解くワークショップ

2022年11月16日 / 12月7日 / 12月21日

参加者 | 各回12名 場所 | 慶應義塾大学三田キャンパス

講師 | 新 良太、チューター：森山 緑、石本 華江（慶應義塾大学アート・センター）

01-03 包摂的な文化体験のためのコンテンツ検討 WG

2023年3月1日

ZINE『私たちが生きてきて話したインクルーシヴ鑑賞ワークショップの記録』制作

体裁 | A5版、20ページ冊子

2023年3月3日

東京海洋大学マリンサイエンスミュージアム パンフレット点訳制作

02 地域の文化資源を可視化し、相互につなぐラーニング・ワークショップの開催

02-01 日常の風景の中に文化財を観る：地域の彫刻と建築を学ぶワークショップ

2022年11月28-30日

建築公開日

参加者 | 403名 場所 | 慶應義塾大学三田キャンパス

2023年1月20日

建築ツアー

参加者 | 14名 場所 | 慶應義塾大学三田キャンパス / 明治学院白金キャンパス / 港区立郷土歴史館 / 東京都庭園美術館

講師 | 五十嵐 太郎（東北大学大学院教授）

2023年1月30日

彫刻ツアー

参加者 | 15名 場所 | 有栖川宮記念公園 / 慶應義塾大学三田キャンパス

講師 | 黒川 弘毅（彫刻家 / 武蔵野美術大学彫刻学科教授）

02-02 地域の寺院を訪ねる：寺院の文化財と現代における活動を学ぶワークショップ

2023年2月4日

参加者 | 20名（うち視覚障害者8名、聴覚障害者2名） 場所 | 泉岳寺

講師 | 牟田 賢明（泉岳寺知客兼受処主事）、本間 友（慶應義塾大学アート・センター / モデレータ）

03 文化財に触れる：「オブジェクト・ベースト・ラーニング」ワークショップの開発と開催

03-01 地域文化を対象としたオブジェクト・ベースト・ラーニング

2022 年 12 月 20 日

地域文化資源を対象とした「オブジェクト・ベースト・ラーニング」実践のための WG ①

参加者 | 7 名 場所 | オンライン

2023 年 1 月 25 日

「オブジェクト・ベースト・ラーニング」ワークショップ

参加者 | 15 名 場所 | YOKOTA TOKYO

講師 | 渡部 葉子 (慶應義塾大学アート・センター)

2023 年 2 月 24 日

地域文化資源を対象とした「オブジェクト・ベースト・ラーニング」実践のための WG ②

参加者 | 6 名 場所 | Japan Cultural Research Institute

都市のカルチュラル・ナラティブ '22

執筆 | 石本 華江 / 桐島 美帆 / 本間 友 / 新倉 慎右 / 森山 緑

編集 | 「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクト (新倉 慎右)

協力 | 吉岡 萌 / 福田 真子 / 木原 有紀子 / 長谷川 紫穂

発行 | 「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクト実行委員会

慶應義塾大学アート・センター

108-8345 東京都港区三田 2-15-45

電話 03-5427-1621 Fax 03-5427-1620

<http://www.art-c.keio.ac.jp/>

助成 | 令和 4 年度文化庁 Innovate MUSEUM 事業

2023 年 3 月 6 日

Cultural Narrative of a City '22

written by | Kae Ishimoto/ Miho Kirishima/ Yu Homma/ Shinsuke Niikura/ Midori Moriyama

edited by | Cultural Narrative of a City Project (Shinsuke Niikura)

cooperated by | Megumi Yoshioka/ Mako Fukuda/ Yukiko Kihara/ Shiho Hasegawa

published by | The Cultural Narrative of a City Project
Keio University Art Center
2-15-45, Mita, Minato-ku, Tokyo, 108-8345, Japan
+81-3-5427-1621
<http://www.art-c.keio.ac.jp/>

supported by | The Agency for Cultural Affairs, Government of Japan
in the fiscal 2022

6 March 2023

表紙 | 港区立郷土歴史館 (撮影: 新倉 慎右)

Cover | Minato City Local History Museum (Photo by Shinsuke Niikura)



KEIO
UNIVERSITY
ART
CENTER